

原発性胆汁性肝硬変

原発性胆汁性肝硬変とは

本来はウイルスや細菌のような異物をやっつけるはずの私たちの免疫機構が、間違って肝臓のなかの胆管細胞をやっつけてしまう病気です。肝硬変という言葉がついていますが、全員が肝硬変になっているわけではありません。その意味ではこの名前は適切でないかもしれません。

原因は

明確な原因は、まだ分かっていません。ただ、一部の細菌や化粧品の使用が関係している場合もあるようです。

症状は

何も症状がない場合から、皮膚のかゆみや身体のだるさを感じるまで様々です。進行すると黄疸(目や皮膚が黄色になる)が出現します。

診断は

アルカリフォスファターゼやガンマ GTP といった血液検査に異常があり、眼で見える範囲の胆管に異常がないような場合にこの病気を疑います。抗ミトコンドリア抗体という自己抗体が検出されることが多いです。そのような場合に肝生検といって、肝臓に注射針のようなものを刺して、肝臓の一部を採り顕微鏡で調べる検査を行います。

また、食道や胃に静脈瘤というおおきな血管が出来ることがあります。これから出血すると大出血になりますので、胃カメラにより調べて必要により治療を行います。

治療は

ウルソデオキシコール酸という薬を使用します。多くの方はこの薬により進行を抑えることが可能ですが、中には治療への反応が悪い方がおられます。その場合は特殊な治療が、必要となることがあります。

進行の具合はひとそれぞれです。中には進行の早い患者様もおられ、それらの患者様の一部は肝臓移植を必要とすることもあります。そのため、専門医の

もとでしっかり診てもらうことが重要です。